

# O unico encontro na vida

～一期一会の思いを込めて～

No.1 2017.10.01

Olá (ポルトガル語), Hello (英語, タガログ語), 您好 (中国語), 안녕하세요 (韓国語), こんにちは (日本語), 私は教育政策課指導主事の河合成始です。平成29年度国際協力派遣事業で、昨年度に引き続きブラジル連邦共和国パラナ州に来ています。11月末日までの期間, パラナヴァイ市(8万人), クリチバ市(180万人), マリングア市(38万人)をそれぞれ訪問して, 次のような教育に関する情報交換等を行う予定です。特に, 2008年に豊橋市教育委員会と教育に関する提携を結んだパラナヴァイ市での活動には重点をおきます。

## 【主な業務内容】

- ・ブラジルへの帰国者(子ども, 保護者)の実態把握と今後の支援方法等について協議
- ・教科指導方法や子ども理解のための研修の重要性等について情報提供
- ・日本の学校文化等の紹介 \*岩西小と幸小の学校生活を映像で紹介
- ・豊橋市とパラナヴァイ市の児童作品を通じた教育交流連携活動の拡大並びに活性化

## 木村 元 (はじめ) 日本総領事との夕食会

総領事公邸での夕食会に, ABD「出稼ぎ協会」平松会長(写真左), パラナ連邦大学生白岩ブルノ氏(写真右), 通訳大島モニカ氏, 共々招待をしていただきました。

\*豊橋市の指導主事がお世話になった池田総領事は, この4月からモザンビークで勤務をされています。

木村総領事は, パラナヴァイ市副市長カトウ氏の活躍の様子や日本からブラジルに戻った児童生徒の問題など, 多様な話題をフランクに話されるため, 私たちは安心して意見交換をすることができました。

その一方で, 日本生まれの白岩ブルノ氏が, 14歳での帰伯後に直面した現実(アイデンティティや心の葛藤等)について語った内容には, 心を動かされました。白岩氏が日本語スピーチ大会で話した内容については, 別添資料をご覧ください。



### ■■ 小中学生のみなさん! 「時間に関する問題文」を読んで, 後の問いに答えてください。

⇒私マリオは, 9月26日(火)9時45分, セントレア発の飛行機でフランクフルトに向けて出発し, ちょうど12時間後に到着しました。フランクフルト空港では, 乗り換えの飛行機を7時間20分待ち, ようやくサンパウロ空港に向けて出発しました。そして, 11時間50分のフライト時間を要して, 無事に到着しました。

Q1 マリオが飛行機を降りた国は, どこですか。

Q2 マリオがサンパウロ空港に到着したのは, 何月何日の何時(現地時間)ですか。

<答えは次号で…>

## 素直に（新）

「あんたはブラジル人よ。だから、いつまでも日本にはいられないの。」  
中学 2 年生の春、そう母に言われた時、わたしは自分の居場所を奪われた思い  
でした。居場所だけでなく、友人から生活まで、全て。

日本で生まれ、育てられたわたしは、ごく普通の中学生として、楽しい  
毎日を送っていました。一時的にブラジルで勉強した時もありましたが、日本  
に戻ってからは一生懸命努力して、日本語を学びました。徐々に言いたいこと  
が伝えられるようになり、自分の日本語が上達していくのを感じて、すごく嬉  
しかったのを覚えています。いろいろな人と仲良くなり、友達もたくさんでき  
ました。勉強はあまり得意な方ではありませんでしたが、部活に励んだり、毎  
日のように友達と遊んだり、という当たり前の日常が本当に好きでした。しか  
し、その大好きだった日常が、突然、母親からの一言で、すべて無くなってし  
まったのです。せめて、日本にいられる残された時間を楽しもうと、ブラジル  
への引っ越しのことは誰にも伝えず、出発の日まで忘れたふりをし続けました。  
それが唯一自分の辛い思いを和らげ友だちに気を使わずに済む方法だったか  
らです。最後の登校日、やっと引っ越しのことをみんなに伝え、お別れ会をし  
てもらいました。その後、飛行機に乗った時には、もう大泣きをしてしまい、  
わたしの心は完全に折れてしまっていました。

「ブラジル」という、当時のわたしにとっては、ほとんど未知の場所に  
着いてからも、ここでの生活になかなかなじむことができませんでした。日本  
と何もかも違うこの国について、第一印象などというものが出来る前に「嫌い  
だ」と思いました。自分が望んだわけでもないのに、来させられたわたしには、  
この国を好きになどとなれるはずもありませんでした。好きだった日本へは、  
もう帰れない。何をしてもすぐつまらなく感じ、日本へ帰りたいという気持ち  
だけがつのっていきました。その上、友達はだれ一人おらず、心細くて、いつ  
も孤独感でいっぱいでした。高校に入ってから、やはり友だちがほしい、と  
思いましたが、正直、どうすればいいのかわかりませんでした。わたしの好き  
なものはすべて日本のものばかりでブラジルの人達にはわからなかったんです。  
それで、他人に合わせて、無理矢理人と付き合おうとしました。例えば、ブラ

ジルでは、ほとんどの男子がサッカーをすることに気づいたわたしは、彼らと一緒にサッカーをするようにしました。本当は好きでもないサッカーをし、彼らの仲間入りをすることができましたが、その時のわたしは、他人の意見を意識することしか頭にありませんでした。また、次第に彼らと過ごす時間が増え、いろいろな話をするようになりましたが、実際には、わたしはただ近くで彼らの話を聞き、頷いていただけで、自分の意見は一度も口にしませんでした。そんな毎日を送っていましたが、時間がたつにつれ、他人に合わせるのがだんだん辛く、そして、しんどくなっていきました。わたしは、自分の気持ちにうそをつき続けることができなくなり、彼らとは距離を置いて、再び独りで過ごすようになりました。

その後、両親と相談をして、ブラジルで大学進学をすることに決めたわたしは、連邦大学の日本語学科に入学しました。また日本語の勉強ができると思うと、本当に嬉しかったです。もともと日本語は勉強していたので、先生に勧められ、最初のクラスは飛ばすことになりました。新入生の中で、一人だけ上のクラスに入り、また浮いてしまうのかという不安もありました。ですが、それは、わたしの中で、すでに覚悟していたことでした。「他人を喜ばせるためだけに物事をするのはやめよう。せっかく好きな日本語を勉強するんだから、思いっきり自分らしくやってやろう。」こう自分に言い聞かせながら、高校の時のように、素直でない自分から生まれ変わることを決意したのです。

おかげで、私は大学で親友と呼べる程親しい友達が3人もできました。1年が立とうとしている今は他の友達もたくさんできて、とても充実した大学生活をおくっています。

自分の気持ちに素直であろうとするだけで、心から信頼できる友人ができて、今は日本語教師になるという夢も見つかりました。自分自身に素直であること。これが、充実した人生を生きるために、最も大切なことなのではないでしょうか。